

中世トビリスイ史から

グリゴリ・ベラツェ*

北川 誠一訳

八世紀三〇年代のトビリスイ・アミール領成立後、その政治的中心地、以前のキリスト教カルトリ王国（東グルジア）の首都で、アラブに征服されたトビリスイは、カリフ政権の政治・宗教的、文化的生活の中に組み込まれ、間もなくザカフカースにおけるイスラームの重要な要塞になった¹。そして、八世紀の半ばにして既に、種々のイスラーム文献の中で、出自や活動がトビリスイ（ムスリムの記したテキストの中ではティフリース）に関係のあるムスリム学者が散見され、彼らが「ティフィリースィー」というニスバ²を持っていることを見るのは驚くに当たらない。トビリスイ・アミール領の公認宗教はスンニー派イスラーム教であり、この地域住民の知識人グループの間でも正統のスンニー派に忠実な人々が多数であったことを考えると、このようなニスバを持っている人々の大部分が、スンニー派であると言える³。これと同時に、最も初期の「アル・ティフリースィー」というニスバを持っている人々の中には、シーア派の人々もいる。これらの人々のトビリスイにおける活動に関する具体的証拠は、全く少ないが、それでもその僅かな記録は、ザカフカースのこの地域におけるシーア派反対派の早い時期における浸透について語ることを可能にしている。

この論文の末尾において、八一九世紀トビリスイのシーア派運動の先駆的活動家とシーア派の宣伝活動について改めて論及し、具体的に彼らの名前を挙げ

よう。しかし、その前に、ここで論述しようとするトビリシ市史の一面に直接関係があると思われるが、あまり知られていないシーア派の伝承について述べたい。ここで述べようとする伝承はいくつかの古伝承集に記載があるが、そのなかでも最も古いものはイランにおけるシーア派の中心地クムの歴史である『クム史』である。この史書は三七八（西暦九八八—八九）年にアラビア語でハサン・イブン・ムハンマド・イブン・ハサン・アル＝クミー（没年四〇六—一〇一五/一六年）によって記された。一〇〇一—一五九二/九二年の写本に基づいた刊本はセイエド・ジャマルッディーン・テフラニーによって一九三四年にテヘランで出版されたが、ここではこの史書に関する詳細な記録や文献批判には立ち入らない。ここで言及しようとするのは、同書第一章の八節で、ここではクムの歴史と住民の美德が賞賛されている。シーア派の牙城であるこのクムの美德と重要な意義に関する第一章第八節の中には、数々の伝承とシーア派のハディースや宗教上権威ある人々の金言が述べられている⁷。この資料に引用されている金言の大部分は、シーア派の第六代イマーム、アブー・アブドラー・ジャアファル・アル＝サーデク（一四八/七六五年没）にかかわっている。つまり、これら権威ある金言の一つに、ことのほか興味深い「ティフリース」という地名を見つけるのである。特に『クム史』の翻訳者はアラビア語原文からの引用を付して、特別優れた都市に関するハディースをペルシア語に翻訳している。イスナードでは、このハディースはハサン・イブン・ユースフとハーリド（・イブン・）アビー＝ヤズィードに言及しているが、後者の場合ではあるとき第六代イマームは、次のように述べたと記述されている。「神は、いと高く、讃えられてあれかし！、あらゆる町々からクーファ、クム、ティフリースを選ばれた⁸」。

情報源（つまりハサン・イブン・ユースフとハーリド・イブン・アビー＝ヤズィード）を明記した上で、上に訳出された金言は、ここ以外では、有名なシーア派ハディース集で、サファヴィー朝時代に著名なシーア派学者シェイフル

イスラーム・アル＝マジジュリシー（一一一〇／一六九八—九年没）⁹によって編纂された『ビハール・アル＝アンワール』にも所収されている。『ビハール・アル＝アンワール』より後の資料では、一九世紀末から二〇世紀始めのペルシア語で記されたコム史、ムハンマド・アリー・イブン・ムハンマド・フセイン・イブン・アリー・イブン・バハーウッディーンの『タリーフ・イ・クム・ムサンマー・ビ・アンワール・ワ・アル＝ムシャシャイン』（一三二五／一九〇七年完成）の文中にも見られる。同書の最初の（知られている限りでは唯一の）巻は、一三二七／一九〇九年にテヘランで石版で出版されている¹⁰。我々に興味のもたれるハディースは、第八章第一二節に「聖都」¹¹クムの多くの美称の一つ「ムフタル・アル＝アンヴァール」という表現の解釈に関連して見られる。これに関して、同書の著者は、アル＝マジジュリシーの「ビハール・アル＝アンバール」に言及して、クーファ、クム、ティフリースを選び挙げることに關してのハディースを最初アラビア語、続けてペルシア語で引用している¹²。

このシーア派の伝承の真憑性とそれが伝達されたイスナードの真偽性については、ここでは述べないが、小論発表の機会に、ハディース学の専門家の教えを請いたい。ここでは、中世イスラーム世界では興味あるハディースが流布していた事実の確認と評価に限りたい。ここに記された金言は、この伝承が真実であるか（シーア派の第六代イマーム自身の口からでたかどうか）、あるいはこれが後世の偽作かにかかわらず、トピリス市の宗教の歴史の重要な意味と独自の証拠である。

上述のように、『コム史』やその他の資料によると三市が、選抜かれて卓越していることについての金言はイマーム・ジャアファル・アル＝サーデクに帰すると言われる。クム市自体においても他のシーア派の町々と同じく、彼の名前は特別の尊敬の対象であり、彼の名声はアリー・イブン・アビー・ターリブを除いては他のどのシーア派イマームにも勝るものである¹³。この金言では、この偉大なイマームの保証によって、クーファやクムのような、誰でも承認して

いるシーア派とシーア派の学問の中心地と並んで、トビリシ市（ティフリス）は、彼のおかげで事実しる伝説にしる一種の特別な「功績」がシーア派運動の中で与えられている。逆の場合、筆者にはそのように思えるが、このハディースを引用する際に中世のシーア派の著述家、また彼らの著作の多数の読者は、かくも権威あり、純粹にシーア派的なハディースの内容に、然るべきシーア派的評判のない都市の名前が、彼らにとって神聖なシーア派の二中心地クーファとクムに続けて指摘されたことに驚き、ショックさえ受けたに違いない。

シーア派（イマーム）派の間に出現し広まった、この町の優越、特別性の理由になった先に予測したトビリシの「功績」とは、具体的にどのようなことであろうか、著者には今のところ明かではない。しかし、愚考するところによれば、もしトビリシがシーア派の栄光に包まれていたとすれば、すなわちその栄光の起源は、この都市の歴史、形成過程（九—一〇世紀）、およびその後のこの町のムスリム住民の一部であったシーア派と何らかの歴史を持つはずである。遺憾ながらこのテーマについては、我々のイスラーム時代のトビリシ史の宗教思想面の研究の遅れのため完全に明らかにされた訳ではない。¹⁴ それにもかかわらず、この論文冒頭で述べたように、ここでは直接にしる間接的にしる、シーア派の宣伝がトビリシ・アミール領期の最初期からトビリシに浸透した事を示すいくつか具体的な事実をとりあつかう。

これにかかわって、歴史家達の研究で明らかのように、アラブによって占領されたトビリシにおけるシーア派の宗教政治思想の流布においては、クーファからの布教者が重要な役割を果たした。彼らの中には、特に興味あることであるが、イマーム・ジャアファル・アル＝サーデク（先に述べたようにクーファ、クム、ティフリスが優れているという興味ある金言の作者）の信奉者である学者達がいた。

このような活動家の一人とは、例えば、アル＝ファドル・‘イブン・アビー・クラ・アル＝タミーミー・アル＝サマンディー・アル＝ティフリースイー（ハ

一九世紀始め)である。アル=ナジャーシー(四五〇/一〇五八年)、アル=ティフリーシー(四六〇/一〇六七-六八年)及び他数人のシーア派著述家の人名事典的著書の簡略な記載によれば、アル=ファズル・イブン・クッラは、ジャアファル・アル・サーデク周辺の学者の一人で、彼の口から述べられるハディースを聞いた。後になってクーファのイマーム達のこの布教の活動がトビリシを始めたとするザカフカースの諸都市に生じた。¹⁶資料にはアル=ティフリーシーというニスバを持つ彼の同志で後継者の名が残されている。この人物は、アブー・ムハンマド・シャリーフ・イブン・サービク・アル=ティフィリシーで、クーファからトビリシにやってきてここに住み着いたと述べられている。¹⁷上記の人々以外に、八世紀末九世紀にトビリシに関係したシーア派学者には、ブスル・イブン・パイアーン・イブン・フムラーン・アル=ティフリーシーとアブー・ムハンマド・アル=ハサン・アル=ティフリーシーがいる。前者はイムーム・ジャアファル・アル=サーデクの信奉者であり、後者はイマーム・ムサー・アル=カーゼム(一八三/七九九年没)とイマーム・アリー・アル=レザー(二〇三/八一八年没)¹⁸の信者であった。

残念ながら、これらの学者のトビリシ時代のはっきりとした期間と何か他の補足的詳細は、残された資料からはうかがえない。しかし、彼らの生涯や活動ではこの時期が何か特別の意味を有していたことは疑うことができない。もしこれらの熱心なシーア派教徒が自分達とトビリシとの関係が重要でなく、無意味だと考えていたら、自分のニスバをアル=ティフリーシーとはしなかっただろう。

上で、検討した事実は、比喩的に言えば、トビリシ史の古く、驚くほど色数の多い絨毯の「初期シーア派装飾」の一房に過ぎない。この「装飾」¹⁹の綿密な修復及び、グルジア・キリスト教的、及びその他の(アルメニア的、ユダヤ的、およびその他の)模様と並んで数世紀にわたって、先に述べた想像の絨毯に、固有の場所を占めてきた、一体に複雑な「イスラーム模様」の修復は、将

来の研究の課題である。将来の研究にあたっては、最も一般的外観がたどられたにすぎないグルジアの首都の歴史をもっと明らかにする、新しい興味ある資料が現れることが期待される。

註

- ①トピリスィがムスリム支配者からグルジア人によって解放されたのは、四世紀後の一一二二年であった。この町の解放者で、ここを統一グルジア王国の首都とした王大ヴィティ四世建設王（一〇八九—一一二五年）は、ムスリム住民の信仰、文化、習慣に関しては大変な注意と尊敬を払った。それについては、ムスリム自身の資料にも記されている。参照、V. Minorsky, “Caucasia in the History of Mayyafariqin.” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, vol. VIII, part 1, London, 1949, pp. 33-34 ; E. T. Sukharulidze, “Al-Fārikī v Gruzii.” *Semitologiuri dziebani (Studia Semitica)*, kn. 2, Tbilisi, 1955, s. 89-90 (ma gruz. jaz.) ; O. B. Tsikitishvili, “Svedenija Sibt ibn al-Jauzī o Davide Stroitele (ダヴィド建設王に関するスィプト・イブン・ジャウズィーの証言)”, *Trudy Tbilisskogo Gosudarstvennogo Universiteta* (国立トピリスィ大学紀要), t. 118, Tbilisi, 1967, s. 204-205, 211-212 (na gruz. jaz.)
- ②アル＝ティフリースィーというニスバを持つ中世のムスリムに関する文献については、E. T. Sikharulidze, “Svedenija as-Sam`āni o Gruzii (「グルジアに関するサーマニーの証言」)”, *Vostochnye materialy po istorii Gruzii* (グルジア関連東方史料), kn. 1, Tbilisi, 1976, s. 45-53 (na gruz. jaz.) ; G. I. Japaridze, “Musul'manskie dejateli VIII-XIV vv. s nisboj ” al-Tiflīsī (ティフリースーのニスバを持つ八—十四世紀のムスリム人物)”, *Matsne (Izvestja Akademii Nauk Gruzii), serija jazyka i literatury*, Tbilisi, 1989, No. 4. s. 77-88 ; 1900, No. 1, s. 65-78 (na gruz. jaz.) ; G. I. Japaridze, “Tbilisskij uchjony XIII veka v Maraginskoi obserbatorii. (「マラガ天文台のトピリスィ出身学者」)”, *Matsne (Izvestja Akademii Nauk Gruzii), serija jazyka i literatury*, Tbilisi, 1984, No. 2, 99-110 (na gruz. jaz.) ; G. I. Japaridze, “Najm al-Din al-Tiflīsī shā'ir min al-qarn al-sabī` al-hijri (「ヘジラ暦五世紀の詩人ナジュムッディーン・ティフリースィー」)”, *Majalla Majma`al-lugha al-`arabiyya bi-Dimashq*, vol. 58, fasc. 4, Damascus, 1403/1983, pp. 795-804
- ③これについては、以下を参照。Ibn Haukal, *Configuration de la terre (Kitāb sūrat al-arḍ)*. Introduction et traduction avec index par J. H. Kramers et G. Wiet. Beyrouth-Paris, 1967, t. II, p. 333 ; E. T. Sukharulidze, “Ibn Haukal o Tbilisi.”, *Vostochnye materialy po istorii Gruzii*, kn. 1, Tbilisi, 1976, c. 34-36 (na gruz. jaz.)

- ④クム市については、J. Calmard, “Kum”, *The Encyclopedia of Islam*, New Edition, vol. V, fasc. 83-84, Leiden, 1986, p. 369-372 (ここにこの都市の歴史に関する基本的な文献目録がある)。
- ⑤*Kitāb-i Ta’rikh-i Qumm*, edited by Sayyid Jalāl al-Din Tihirānī, Tehrān, 1313/1934 (以下、T. Q. と略称)
- ⑥これらの歴史文献については以下を参照。Ann K. S. Lambton, “An Account of the Tārikh-i Qumm”, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, vol. XII, parts 3 and 4, London, 1948, pp. 586-596 ; see also : Ch. Rieu, *Supplement to the Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum*, London, 1895, pp. 59-60 ; C. A. Storey, *Persian Literature. A bio-bibliographical survey*, Translated into Russian and revised, with addition and corrections, by Yu. E. Bregel. Part 2, Moscow, 1972, pp. 1008-1009 ; F. Rosenthal, *A History of Muslim Historiography*. Leiden, 1968, pp. 160-161 ; F. Sezgin, *Geschichte des arabischen Schrifttums*, Bd. I, Leiden, 1967, S. 352-353 ; Mudarrisi Tabatabā’i, *Kitābshināst-yi āthār-i marbūt be-Qumm*, 1353/1974, pp. 10-43.
- ⑦T. Q., pp. 90-100 ; cf. : *Compendium libri Kitāb al-Boldān autore Ibn al-Fakih al-Hamadhānī*, edidit M. J. de Goeje. Lugduni Batavorum, 1885 (“Bibliotheca Geographorum Arabicorum”, v), p. 364 ; *‘Ajā’ib al-Makhlūqāt*, ed. by M. Sūtūde, Tehrān, 1345/1966, pp. 259-260 ; *Ta’rikh-i Qumm musammā bi-Anwār al-Musha`sha`in*, vol. I, Tehrān, 1327/1909, pp. 10-14 ff. ; P. Schwarz, *Iran im Mittelalter nach arabischen Geographen*, Bd. 5, Leipzig, 1924, S. 561, Anm. 9-10.
- ⑧T. Q., p. 97 :
- va ham az vey rivāyatast az Hasan b. Yūsuf va ū az
Khālid abī Yazid va ū az abī `Abdillāh alaihi al-salām ke ū farmūd
ke haqq jill va alā az jamī’ shahrhā Kūfa va Qumm va Tiflis-rā bar guzide ast.
- ⑨“Bihār al-Anwār” とアル=マジュリスイーのペルシア語とアラビア語の他の著書については、以下を参照せよ。E. G. Browne, *A Literary History of Persia*, vol. IV, Cambridge, 1953”, pp. 120, 194, 358-359, 366, 381, 403-404, 409-410, 416-418, 432 ; C. A. Storey, *Persian Literature. A bio-bibliographical survey*. Section II, fasc. 1. London, 1935, pp. 196-198, 215-216 ; C. Brockelmann, *Geschichte der arabischen Litteratur*. Supplementband II, Leiden, 1938, S. 572-573 ; *The Cambridge History of Iran*, vol. 6, Cambridge University Press, 1986, p. 964
- ⑩*Ta’rikh-i Qum musammā bi-Anwār al-Musha`sha`in*, vol. I, Tehrān, 1327/1909 (書名は最初のページによるが、著者自身は本文中で、“*Anwār al-Musha`sha`in fī zikr sharāfat al-Qumm wa-l-qummiin*” と呼んでいる。同上書4頁を参照)。この著作と著者については以下を参照。C. A. Storey, *Persian Literature. A bio-bibliographical survey*, Translated into Russian and revised, with addition

and corrections, by Yu. E. Bregel. vol. 2, Moscow, 1972, pp. 1009-1010 ; *Mū'allifīn -i kutūb-i chāpi-i fārsī va `arabī. . . ta'lif-i Khānabāba Mushār*, vol. IV, Tehrān, 134 2/1963-64, pp. 348-350

- ⑪著者は30に及ぶこのような美称を挙げ、解説を加えている。*Ta'rikkh-i Qum musammā bi-Anwār al-Musha`sh`ain*, vol. I, p. 96 を参照せよ。
- ⑫*Ta'rikkh-i Qum musammā bi-Anwār al-Musha`sha`in*, vol. I, bāb VIII, nūr-i Musha`sha` XIII, p. 121
nūr-i mush'asha' sīzdahom dar dhikr hadithi ke delālat dārad bar būdan-e Qom mukhtār al-balād ham chonānike `alāme-ye majlesi dar bahār mifarmāyad va `an al-Hasan bin Yūsuf `an Khālid bin Abi Yazīd `an Abī `Abd Allāh `alāihi as-salām qāla an Allāh ikhtār min jamī `al-balād Kūfe wa Qum wa Tiflis ya `nī imām Ja`far Sādeq `alāihi as-salām farmūdand Khudā ikhtiyār namūd az jamī `al-balād Kufe va Qom va Tiflis.
- ⑬M. G. S. Hodgson, "Ja`far al-Šādīk", *The Encyclopedia of Islam*, New Edition, vol. II, fasc. 28, Leiden, 1962, pp. 347-375 ; S. H. M. Jafari, *Origin and Early Development of Shi`a Islam*. London-New York, 1979, pp. 259-260
- ⑭興味深い伝承の分析に際して、後世の書き加えや書写の過ちを見逃してはならない。「ティフリースイー」という名前がこのハディースの筆者上の異形の一つで、偶然何か別の以前に述べられていた（点を打つのが難しい）地名に置き変わって、さらにこのハディースのテキストの中に固定してしまったことを原則として除外しない。しかし、そのような場合でも 第六代のイマームの金言に、トビリシの名前が混入したり、固定化したことは、シーア派におけるこの場所の知名度と、シーア派（アル=マジリスイーのような権威あるシーア派の学者を含め）が、何の解説もなしに神がクーファ、クム同様にトビリシに好意をもったという伝承を受け入れる下地があったという証拠になる。
- ⑮その実それらの側面の研究は、故ガバシュヴィリ (V. H. Gabashvili) 教授が正しく述べられたように、トビリシの歴史だけでなく中世キリスト教グルジアとイスラームとの宗教的思想的接触史の問題解明にとっても興味もたれる。
- ⑯Abu Ja`far Muhammad b. al-Hasan al-Tūsī, *Rijāl al-Tūsī*, edited by Sayyid Muhammad Sādiq Āl Bahr al-`Ulūm, al-Najaf, 1381/1961, pp. 271, 489 ; Abū al-`Abbās Aḥmad b. `Alī b. Aḥmad b. al-`Abbās al-Najashī, *Kitāb al-rijāl*, publication of the Markaz-i Nashr-i Kitāb, Chāpkhāna-yi Mustafavi, n. d. p. 237. Evidence on this person is also found in the biographical dictionaries of al-Barqī (d. 274/887-88 or 280/893-94) and Ibn Dā`ūd al-Ḥilli (d. 740/1339-40). Both these works are published under a single cover in 1963 by Sayyid Jalāl-Dīn al-Husainī al-Urmavī al-Muhaddīth in Tehrān : Abū Ja`far Aḥmad b. Abī `Abd Allāh al-Barqī, *Kitāb al-rijāl* ; Taqī al-Dīn al-Hasan b. `Alī b. Dā`ūd al-

- Hilli, *Kitāb al-rijāl*, Tehrān University Press, 1342/1963 (Intishārat-i Dānish-gāh-i Tehrān”, No. 857) ; on the person we are dealing with (i. e. al-Fadl b. Abi Qurra al-Tiflisi), al-Barqī, p. 34 ; Ibn Dā’ūd, pp. 271, 492 を見よ。
- ⑰al-Najashi, p. 148 ; al-Tūsi, p. 476 ; Ibn Dā’ūd, p. 461 ; Abū `Amr Muḥammad b. `Umar b. `Abd al-`Azīz al-Kashshī, *Rijāl al-Kashshī*, edited by Sayyid Ahmad al-Husaynī, 1388/1963-64, pp. 292
- ⑱al-Barqī, p. 51 ; al-Tūsi, pp. 160, 371, 397 ; Ibn Dā’ūd, p. 569 ; G. I. Japaridze, *Musul’manskie dejateli VIII-XIV vv. s nisboj “al-Tiflisi”*, s. 78-79, 81
- ⑲この飾りの復元に際しては、もう一度トピリスィの世襲的なアミールで、九世紀八〇年代から二世紀ここを統治したジャファル朝 (Banū Ja`afar) に注意を払う必要がある。この王朝の名称自体、またこの家では比較的アリーとジャアファルという名前が多い事が、このトピリスィ支配者は親アリー家である可能性が指摘される。これに関して、九世紀の有名な詩人カトラーン (465/1072年以降の没年) のトピリスィ・アミールの、アブルファドゥル・ジャアファル・イブン・アリーを讃えたペルシア語のカシイーダに興味を引かれる。ここではアミールが「セイエド」と呼ばれている。彼はこの同じ詩人の別の詩でもセイエドと呼ばれている。 (*Divān-i hakīm-i Qatrān-i Tabrizī*, edited by Muḥammad Nakhjavānī, Tabriz, 1333/1954, pp. 45-46, 286 を見よ。A. Kesravi, *Shahriyārān-i gumnām*, Tehrān, 2535/1976 (4th edition), pp. 271-272, 277-280 を参照せよ)。この記述はイランの学者アフマド・キャスラヴィーの注意を引き、トピリスィのアミール、ジャアファル朝はアリー家の子孫で、そのためカトラーンは彼を「セイエド」と呼んだのであると予想した (A. Kasravi, *Shahriyārān-i gumnām*, p. 177)。この想定を念頭に置いて、残っているトピリスィ・アミール・ジャアファル朝の貨幣には何らシーア派に同情的な要素は見られないという事実を認識しなければならない。トピリスィのジャアファル朝と彼らの貨幣については、M. L. Lordikipanidze, “Iz istorii Tbilisskogo Emirata (トピリスィ・アミール領史から)”, *Mimomkhillveli*, kn. 2, Tbilisi, 1951, s. 185-201 (na gruz. jaz.) ; M. D. Lordikipanidze, “Voznikovenie novykh feodal’nykh knjazhestv (「新封建領の発生」)”, *Ocherki istorii Gruzii* (「グルジア史概説」)”, t. 2, Tbilisi, 1973, s. 502-506 (na gruz. jaz.) ; E. A. Pakhomov, *Monety Gruzii* (「グルジアの貨幣」), Tbilisi, 1970. s. 46-49, 289-291, tablitsy II-III ; D. G. Kapanadze, *Gruzinskaja numizmatika* (「グルジア古泉学」), Tbilisi, 1969, s. 55-57, tablitsy III-IV ; D. M. Lang, *Studies in the Numismatic History of Georgia in Transcaucasia*, New York, 1955 (“Numismatic Note and Monographs”, No. 130), pp. 13-16, pl. I, No. 10) ; I. Jalagania, *Inozemnaja moneta v denezhnom obrashsheni Gruzii V-XIII vv.* (「5世紀から13世紀グルジアの通貨流通における外国貨幣」), Tbilisi, 1979, c. 62-68, 表 27-28 ; G. I. Japaridze, “Monety Tbilisskogo Emira `Alī ibn Ja`afara 「トピリスィ・アミール、アリー・イブン・ジャア

ファルの貨幣」), *Problemy istorii Zakavkaz'ja* (「ザカフカース史の諸問題」), Tbilisi, 1911, c. 132-150

*グルジア共和国科学アカデミー
東洋学研究所副所長

Summary

One scene from the Medeval History of Tbilisi

Grigori Beradze

In one of the shi`t tradition of Imam Ali, it is said that the God choised three sities of Kufa, Qum and Tiflis (Tbilisi) among others. Adding the facts of the early existense of shi`a ulamas in Tbilisi, the auther of this lines stresses the possible special position of shi`a sect of Islam in this city.